紀氏叢書別集

六

国立公文書館
National Archives of Japan

正仲公和歌愚詠集

国立公文書館
National Archives of Japan

愚詠集

春

立春

ゆふやいとゝ砂の方よりくもけすかゝる
年のくれをとふまふ風

右十二月二十六日

一年もこゝ和とりて年をくれはなの
花の美まつこゝろ一つにき

右十二月十九日

去る九日より
ミかつられて夕日の
きりて清しくそらも面白
しくなりぬ形長かりけん
りあるもうつい雪丹なかりこゆきの
ちらくちらつて又降る日の新
右正月初二
春
春時面白成つるくしくなれて
面白き雪丹なと面くえく
思ひきて夕日新らくく

足波と雪丹の面白やタ日この面
白くてちらつかるく降る自うの面
右孟夏初七
白雪形しも面白白
庵の面白しく
ちうもしもてもホけよりふ庵の面
白くしつこのちふ夏の夕日
右孟陽初九
去んかくよう梅枝一折送ら
れりきとのことを書き

漢詩等の事を
人のまこゝ中行も 四ツ谷 柳枝や
茶屋 くらべ くらべ 集を 四ツ谷
右 孟夏十日
正月十日年武士のことをふきく
四ツ谷 正しくいふ 侍ふ 武
かく
武士のよとのつきよ こゝもとこの
ちゝをかるかるの ふのこゝをふきく
去ぬかゝ ミよかを ちゝ

四ツ谷の四ツ谷をま 庵つゝ
ゝして 夢の をとつ き
ゝく
年ちゝき ちゝ 四ツ 夢の
一夢たゝ むつゝ 夢
かをとめ年ちゝ 四ツ 庵ちゝれハ
庵ちゝ 四ツ
右 歌二首 孟夏十一日
去ゝ 庵の ちゝ
泳 ちゝ ちゝ ちゝ この せと

とつれめれいつ百ようも自の
足はきりれい
ゆよをくを妻風をふ庵の味
をきふしよ見ち志照の自
右初妻仲二
とか新年名つき通竹とる
二字畑出ん〳〵へつかいし
つとる年よこてつかいし
とる寄年
正月ふ名らよこて海試要せて

光紙をくるよ世のとも火
右初妻中六
ちんこ合返こ年
君たよふ面のとも火かけて
くらきこ石のれくばてらん是味
四月日
有時予相とくく戸ひきき
見れを雪の深ふれを
庵の面ふを立いて泳ものを
霞紙と有く法雪をかる

孟陽仲九

或人のことを聞ひ侍

しらぬ海人は

白波やそかはく間しほりの

しるも涙恋る世の中

右仲妻初二作

妻の口雪の宿梅枝の

きゝ分れて

妻風のはる雪の宿の春もいま

たゝ雪ふる人の庵の梅枝

はらきの深草ふる

野辺を過て深草はれ初春を

ミやまの奥て初もいつかの夏

右二首仲妻初三作添ス

妻の口去不なる初しる夕まくれ

て三りの人人ふきて

長岡やふる妻の夕への雲をみて

さらはのめきへてあるミう月

右仲妻初六

妻の秋しくれのとゝ

ミうか書ノマヽ

はるかぜ

夫の板や面すらかなくも色の物
ゝ[illegible]つゆとなるいろ[illegible]ふ
町下り行とはすれ[illegible]下名[illegible]
注としるる色きはすれ四物はすれら
人の[illegible]ゝ[illegible]行[illegible]ゝ
見くるを[illegible]ふ[illegible]
一[illegible]死[illegible]ゝ[illegible]
右二首仲夫初七作

相模風風[illegible]
秦やとの相[illegible]
よとゝ[illegible]
右仲春仲一
二月十五夜雲[illegible]
月の光[illegible]
四のめきし[illegible]
折ゝは[illegible]
雲井[illegible]
去[illegible]

里遠き尾の下なるこま
松風のきこえぬらんは
里ぶしくをあふぐ屋の下を
ちりのちりあと　松　みせの春

右　仲美十六

秋色をこのしたふるしてとる
火手むこのしたふる
云の葉のくもはなるを美の秋の
云ちりなるもふるちりしく火の色

右　仲美　俳六　ゆふ

村雀　題しく

折ふしも虫なるやはしの
風ちこつる　もらしめこの
右　仲美二十七

庵梅

時ちてやあの梅花ハわくも
ちつまきまさふ花の美　この
美をちいろよりすふ　梅
見きちはの春ハ春ハ
俳美　初句

庵面冬年足待きしり杖に
徒のきこへ過ぎ小窓しち
ふくもらんを
庵面冬年足きたのつうち
八おの鏡の春を乗しき
晴をせくこうちくふさの中に
人のこゑ海やまらへの野
右紀美伯句
稜の戸開年はうれを
伸ぶのかるらしー竹の之ゑ

うすかなる夕紙高や初ちふ
心ひらし
面を日酒淘伸ふくかくとも少の
光ふうすかくはられ初をしる
右紀美伯八表
獨り開年居ふ稜庵年
月新のちし待きい
ふを星ひくをやりてちに美の春
鈴ふ帰りの春の
紀美伯九　よ空の月新

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

返事二首 [illegible] 実仲朝

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

実仲四

十六夜月の清[illegible]

世の中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

実の[illegible]
[illegible]
[illegible]

実のまこと空うそいろふかうそ叶

終実下句

去ん人のそらへ思ふこゝ中

ゝるゝうむ糸の上つゝ

てかきつゝるゝ

思ふを忘れぬ思こゝをうきの

たくる一章ゝきらめや

終実終七

立ゝ子とゝ

ゝの歌てゝ

思ふゝ物をいかゝかゝゝを意

ゝゝゝ叶面に袖ゝほゝつゝ

返ゝ

実面ゝふゝゝ泪ゝゝはゝゝそら

ゝのいゝ思ゝゝ深ゝふらめ

回終句

初実編生沼ゝ日

ゝふまゝゝて過初実や名殘ゝ

と花ゝふゝゝゝかゝゝ足ゝ

角ゝゝゝまゝゝゝ実にめゝ足はぬ

さくめぐりて世や一年のうち
回りの秋ぞ
そなたこなたと秋ぞうつりゆくや
若年石勝の花しるるゆゆの歌
そなたのくしよりこそ
寄に歌こそ
きくからにこれをかなしき朋なるか
こはなるゆく 神のなくよ
をなをもをもふ戸法の
庵ここく勝ヨ方ようつらるる

彌生下旬

夏

庵に古人の詩曰簫無智永トふ
こ法紙
勝り風の竜の音きこそ静かく
永こ日紙 初夏時二日
夏夜の月

なかむきをあらためて静かに公明の
と祝やう友の月新の志も
所望の和歌
なんとかもの和歌をとる部屋に
宮のはなしをたもいろかなる
右初夏六日の夕
ふもとの自宅又名をあらためて
をなを思ひなほし風次をも
ていまのをちなんに
人るかもちて宮殿や風年清きく

あ素本エノ下

和のをなを自の部
と祝和月中二日の自をれを
ものをつるものの部
なるをなく特に
やかてをしに入なれの衣の自
右初夏仲二述
或ハ沢夕立しに待くて稲
光りの月なくをまをまく
くよはちをなくまく
はをををなくを時く

ゆれて
稲妻や ゆらめきしより星の光に
ゆゆしきまでけなるき 夏のそら 哉

右十五日

玉椿

色さて雪を条とする椿の玉つばき
をなかられるも むつまじきうなる 愚
ゆゆしきを椿椿をきゆふ玉 椿
条をまをふかなこのめゆふこの条 通
何をきやを条中椿のたまはをき

三日れるや雪をる代や色迷へ

右初夏十六日

回夜

ふりの時しつるる三男北のう男の
卯の巻月の新ぶふをも
卯月雨
ゆゆ雨の雲をてちもしを卯のふの
右卯ぶをゆむ四はをきに
晴しよる曇りしを空雨も
北ゆゆ添めのて海ゆうを紅

面中の所

と表しも此面の明るたたのつら

静しむるや雪のともしら

右三首初夏経句ト二

庵の山吹の下咲侍きと

ホトトギスの名所添て

庵の面木くのまくに茶咲く

新しろくて雪の下 此

葵此花又咲添て

折しらず咲ぬる庵の明るい此

の方くに雪のむらと雪のいろ

右二首初夏下句

和日経七の表

ふかはの里新を初むると雪と

和の茶日の つらたのこよ

頭しらに

にこの世年をめぐる時多のかはを

て彼の目もいつちゆくらん

琴

一ふくをとる思ふなよ

新の松をせまるを乗しまま

初夏終旬

和月名残

和の巻の月を名残の松にうれを
思ひをかけ　忘りし色のそら
しのをぬの山をを雷に吐面るらん
空か名残ぬ我かしむやまるに
を宵ぬこ里かしてなるや時鳥
庵の和の巻ちを里を残ら夏
右初夏百日

立公

立自立日淀の水きをあしはやめ桝
簑世彩菓を一かほをやをを せん
立自立日彩菓を水をるはやめくを
うほる自を一を戒や徒無面し
人をなを自彩をを はるしくを
云を一を一の彩をかいしくを
はやめ巻の巻 彩ら我
徒ら庵り新の はや夏の巻をを
をうほるをををを むををををを

仲夏六

夏宵

天はてらす風吹て五月雨の
面白かりし花も名を残しけり

仲夏初旬

五月雨時雨

加の国の白山にふりほうたる
雨をこそ五月雨の雨

初旬

夕立

稲妻の光のうちにすぶ神の

初旬中旬末旬の雨

三日初旬

雨はてらすの清らう
雨しかりかしの彩波涼きを
雨の宿のまやかの彩波涼きを
雨をこそ流の雨のほうは

立公

思ひ初て自雨の雨の
降りなのむらの雨をこの雨

仲夏初旬

或ハ北奥海ヲ渡リ
雁ハまかぬ星ハ
たゝきこし海の
水乗そきて雲風の
かぬ星そのの
形ハ月ハ三ヶ月ハ
仲夏十一
月ハ所にまうぬ星
かゝるこゝ
数の月らかは

やとゝ立ぬとそこ
かゝるこゝ海の
月ハ名残や
山自仲二日の
山自中の二日
庵もよきこ
月ハかゝ
雲ハそ
られる
き海

うゝ市書ノマヽ

茅ちに之ちもきよく雪ふる
日すけそれ〳〵新うきこの夜 通
五〳〵
茅村のひかりまち日すきく一の夜
人〳〵思ひしれ人のせの中
深みまさの添仲長中旬
池のつ已夫
反の夜や池のつ夫の家まる
ひらきそかつかま造のつを中
反の夜虫 不一

夜ふかの湖つ屋のまくをと
五月 百〳〵ひとしの家し
右二添仲反十六
添ちきそ色の沖ちを 三月 百に
ひも茅ちこ雪の水 虫
右日十七
五月雨に雲の寒ひとつれ
仏ちを
ふこ〳〵実の形菓ぬ夫ちや
七月の色ちに木ひくひに

戸里靜かふ五月雨の降
降ハ
こゝ中二ツ有き世間と云ふ 戸里を
早ば靜かふを月面の沈
タ方れ五月面一て不
なしこゝかつかの多の
ちい降しかハ
入相の鐘をきゝ人世の上に
五月面平ハ多かつかし
右三首元五月仲の七

新面ハ湖里の坊かく降も
ゆん地平まかるをそんまくし
ちをを意張やん笠をて也
きし降しかをもふ
早苗ハ家湖のれのををひよ沈月め
ハをををもむや小をぬきちう
五月面のをきして一天
景りかかしをに
ニつ宇ニつある四方平
沈しちんを

五月廿四日宮之脇殿の書
四方に堂をもうしふ堂の事宮
教文伺ひ之ハ自のとく
ちゑ堂文殿堂文伺ひ
かゝらをゝ心堂ちゝ
と教しも庵 廿五日をく
こゝ法もちらに堂ふ文の教
右三首 廿六日 法
清らかなる自をく宮をれ
堂ゝ伺ひをを彩猶手

迎ま自の石ちゝ入をを
見て
雪をれく宮ゝつゝ堂ふ文の教
彩猶ゝつゝる月をゝ
右廿九日
或ゝ時ゝも山寺ゝまかり
ゝ彩ゝ彩猶ゝ時ゝ
つゝをれゝ
山寺の彩猶ゝ郭公
堂れも深世ゝゝ

右五月廿七日よりしきくまかを
をしに沢源山寺へ参詣かをるらも法の
いとやすんしくひらん紙
やまてらの木この梢の雪まても
法の法をとなへ奉るの雪

廿日日

五月雨

時しらぬや時しらぬ雨にまつ
五月の雨に庵を深くす

右三十一日

或る沢思ふらもやをし
水川の神へ参詣を
きてうるいハ参らてるくをつつ成
ひ川の宝の森の下泉
まつ立ちとこるやすれを
をとしハ梅と毎らん古キ
宝居へ参てよめし
かへりをの石碑ハ荒れし苔荒れや
まつる主本の松

右五月二十三源道ス

題しられた

ときはなるいろやはらん住うきゝ

せの中ゆえよりくもこのかしゝ

松枝の月より至も御なの

えゝられい

松枝の木の月しのかやの形を

よるの えうもつ木すゑ月うり

右二首俗世沙

ふる寺枝ゝやしのゝ

春られて対月の秀絵

きゝえきゝ法の法華の古寺の

見きのゝやしゝ月よ見

五月ゝ聖言の細道へ

まうられて

こ法ゝ五月 聖言の細道 月つ見れ中

月つきてゝ月ゝ風のゝ月ゝの郭

二首聖五法

五月やミ月ゝ月ゝ

ゝつきやミゝ見ゝ聖ゝ見 火の

備をなし、明るき内もち

右同日夜

雷雨の中宿

五月雨の空を晴るゝ天津乙女

宮の高松の梢に鳴く

題詠

五月雨の空吹き渡る

松の梢に吹く風の

涼しさやかへる日

いくかなる日

か、るの石鄙にそなへよ此の広

き野に居れば夕暮れおめ

か、るの年住める此の屋をく

泊る事なこの数

回日の夕

東の尾も宮里に望

つゝ日なる事五月やみかな

右八日述

なのかへる日に

なめる

かみ　ゆきを　ふかくつもるの　石部山
ちりを　まとおく　山　郭　公

廿九

題　立　に

うまのうきたちかへりぬるきぬ
宿　の　中　の　秋　しきこの歌

林　鐘　廿六

うちつの　風　紙
外　ぬ　く　風　の　吹　ふ　つ　か　う　ち　を
ゆ　つ　を　と　ち　六　月　の　こ　ろ

林鐘　初九

手　立　て　侍　ら　ん　と　を
の　一　冊　に　な　人　の　か　く　き
ふ　ら　の　み　の　侍　ち　ま　く
ま　て　ら　ら

ま　る　る　立　て　を　重　の　ゆ　ち　ま　こ　と
か　く　し　な　る　ら　て　今　れ　く　ま　る

林　鐘　伸　二

自　の　清　ら　り　な　ふ　れ　ま
天　の　ま　ち　な　く　侍　む　き　を

こゝろもとなく自を任ずる
予かよく人のよく思はざる
奇のきはまり侍りしを
そゝまに従ふ一つらなれ
りとそ

神代まさる絵せぬ奇の道
かなは幾らくそ混らるれ

大和歌三十字一字は夢しらも
思ふまゝをいはれを望りて

右林鐘作句 三首

りちおんのつゝ

庭の樫の蕊咲 霧きらり
しらはくそへ待ちを
家やとの東垣年咲る 朝穴の
霧とかたるふ 霧とそらすし

林鐘作句

六月名残

水を自のなこりかしくも天 陸穴
りとつるあよ ゆまりるかる

秋

初秋

庵の面ハ恒に一きの葉哉

時しらぬ山路ハ思ひよるつ風

右七月廿三日

三ヶ月

天の原立てハ見ぬ人のかゝ哉

秋のゝ草の三ヶの月　孤

右初秋三日作

題しらず

哀ハ浮世の人やとはゞ

きゝふるしてさをつれて

面影や四方の海辺を望られて

ながめ　思ひたゝせの中

右初秋仲旬

良以法印ゆいひ人

むすびしをれを回路の

哀もしをのまゝにかくなん

時しらぬ山を限る雲ハ

哀をしらぬ人のせの中

右初秋仲八
蘭亭一折故大宗公より
送り給り侍りしかば
そらちる秋のうら波の色ふかしその海
の面ふたゝびよ千代や重思へし
右七初秋の比
冬ゆる秋の夜の思ふとも
うしろめたからぬ夜更に
とゝもし火をうちつゞけ
待る時しるかりけりん

思ふとちかゝる夜ふかの夢うつゝ
よくらに立てゝ行のそ
秋の空の色ゆ
ひゝく
とくるもしれぬ人のうら波の秋のそら
さしめなきよのためゆゑにや
右二首秋初句
題しらに
里遠き深山のくれて住鹿の
ゝゝ思ふ時ゆ

右仲秋初三

[illegible]時[illegible]萩[illegible]

直恒[illegible]萩[illegible]

[illegible]陸[illegible]

[illegible]咲萩の枝に[illegible]

[illegible]この[illegible]

[illegible]の文の奥に

[illegible]恒の秋もまくとすれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]書[illegible]

[illegible]のたくひ[illegible]

右仲秋中二

[illegible]の[illegible]

[illegible]書[illegible]

靜さのその[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右仲秋仲旬

八月十五夜

名も高き雪と月の新清水
庵面白くうちに秋の夜
秋の夜をうら淋しくわすれ
ゆえもなくしづかに静
かなるうち去の高かもの
御もすがらて高く松のかぜ
夢をかすかに通ふ夏
しに

静かなる秋の夜ふかのたのしさを

さとは中嘉ノこと、

遠くかなノこと、

よくらの下に咲むしの音

右仲秋下旬

高く表つきのうに伝ひ
かなら月何をむつ伝ふ
可をいつくまかとして
高く名をとつて思むしの
哀ハ事ハ侍ら伝郷現一
往くくは云をを泳奇
閑居の即事八秋の出ス

まつしはなはかゝしそのこゝろ
みへしき庵へをなをせを
まへと
ふたはしまふ秋に来ぬらなきしふき
君かこゝ浪のまこと也たつ行く
と信に詠しられて
竹のはかまはふつらふ秋のむし絵
あんし思ひしもし人の世の中
右 仲秋 絵ほ
庵の浮木

いふまて庵の浮木をへかあく
はかな詠めくもをちらすほ 通
四非の衣きしよかふこふるめく
庵さし見えしはたふ家浮木
いわしもし秋やるめかけ萬しこく
庵売こもちの浮木しはしも里 幽
秋の衣のむし
秋の衣のまむしさ夢に雪しも
むしの夢しをつゆ切らん
静まる枕まさる夜る はるのゝ秋の

出の事ならんとおも
時 しらるる所しいはゆの出
をよをのらきくあそのなりよ 出
右經秋初旬
辭をの又よりれ唐のた
ちつれ作らをれを
拙象屋ちい たつるまよれて
宮好このちえ為伝ちう
經妹初六
秋自

宮時ちう宮靜ちるる秋の板ち
何のむし 海の自こくちきく
右經秋十
自自ちうくくちう
ちしかち宵自にちし入自この方伝
秋の板をうしら 泳む象 この郵 愚生
ちてちれて行菓も高ちきちる
こて海を見めふ ちふの自 この数 是味
靜ちる姫のなら 人のちかちる
自の孔をに 自のうちう 愚生

絶秋十五

秋の夜をうち静まる海の
そばだつ庵の白波
なかなかに物思ひて泣く
ことの限りの秋の夜や
庵の白波ことなれのつらら
なかなかに物思ひ泣くことの限りの
右長自仲句

庵薄

立ち寄るかたもなきまで
なびきぬ

月の白きに秋の来ぬるかな
回下句

顔立てに
とよまれし秋の夜よ人の
通ひ路の月こそ思ひ
侍りしと信せの中納言を
人のこころ秋の夜の
右絶秋下句

行秋名殘

なかなかに何とも知らぬ

[illegible]れし秋の名を思へと
今宵ちる妹の面影ゆかしかな
[illegible]の空の[illegible]
右俳秋留口

冬

殘菊

四方かたちに籠の中に菊の
のこれる沖めの[illegible]

右初冬俳句

題妻

[illegible]
つよ木元砂の[illegible]やとかな

回夏

夏の秋の叫の田造[illegible]
こそよかしこ[illegible]

回冬

添[illegible]を小を雪と雪の雪時
面の風[illegible]冬の夜の自

旅

世よくら浦もかくこそ一かしの
きらにこそ世のたくひのやとこの配
右四首初冬こゝに
初冬自の比つゝ　尊母
正脈の高石　侍殿
しるる時一つ
けよ　思ひそ　こ系書の
一首　一首　田原氏上
よかく

と雪しる水ゐいしをやとれて
君の係を　ちり　大　れ　歌
右初冬八
宇庵の主　一首の
短冊　知る人の
送り侍る
九主のしもこの
くゝ　思ひ　の　系
田氏
題　氏

叶沖く岌られる雲の巻よくら
一ふやゝ〻しを経過るより

右仲四

ちらし沈ちらワくの三海し
ゆるかゝ〻つゝ〻ゆるらかるらハ
ゆる打しし共のとたゝく
庵の松風ゆゝし
打ちふとちち弾ゆ打ちから
来の人打しく彩の松の七
石不陽下旬

神を自つゝ〻ゝき秋の空をゝく
ゆゝき佛しゝ多枯の庵
回廊の八
ちし方ゆゝ回ゆゝの
云葉書しゝ大和うゝ
送り伊里ゆゝ
冬の秋の松也ゆゝ松ゆゝつゝの
冬の空ゆゝ玉八のこゝ
ゝ漢ゝ送ゝ八返
賜ゝ打ゝ百ゆ寺岐の

[illegible]

田舎の秋

公孫[illegible]雲母きやすき[illegible]の色

いとゝもしろしこうの白菊

仲冬於白

初雪

何とも[illegible]思ふこゝろ

公卿[illegible]と舶の[illegible]

昭

相[illegible]四方[illegible]

[illegible]の[illegible]

夕[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

昭

一[illegible]

民の[illegible]の[illegible]

暁月

[illegible]

田の[illegible]の秋の月

昭

この[illegible]の[illegible]暁の

月[illegible]の[illegible]

夕雨

ゆふくれをとをくつたふ窓雨に
長をきかる秋のくさむら

右四句仲秋

初雪

窓ごしに千尾の岬あらはれく
ゆきの外千つもるかの一雪
ゆきふかきを静かなるまよひから
ゆかれつゝある秋の末の空
うきぬ世にこのむの景と砂の色と是

ゆふ雨をてる日の光
見渡せば砂の色とも稀つゝ
しらぬかと思る夕のうみの景 昭

右四霜月仲比

雪中の海千ひろひから
雪の砂里作られ
ゆきの中一とゆ砂る立て景を
何月を中ら思 秋めける二の夕 是
色枯くさもなきゆきの中
冬しくうて思 海の立て景

海

ゆきて雪ふる海の波のうへ
ゆくや雲やとよいせり哉　昭

右二十日

ゆきのつもりぬれば
見ぬ人のくるしみを思へて
ながめふる

こうきいやこの世ぬ人のくるしみを
雪ふる海を思へ
海ふる雪のもとに居ながら
ふつつかしいゆめ

夏を思へ人のこころのくるしみ
つもりてこうきい雪をはらふ
十一月終の二日ながめ
題しられた
かぞへあやまりやふる居の神をも
恨しふ響中はりつめのこゝろ
世の中のくるしみ海をいとはやれ
そのことをふたりよりたかうらもあや
右二首仲秋仲旬

[illegible]

人のあかるとおもふ

[illegible]ゆる人の[illegible]を敬しまの

[illegible]やいらんれなかしよ

終四

八相鐘

つくしゆ[illegible]の叫水泡もそ

[illegible]なるる入れのすも

[illegible]枯

[illegible]しまをかはよう[illegible]多枯の

木の葉をつむ庵の細道

池水

清らかなる庵のいけらつまと清く

住むてふ名をいかなる[illegible]

竹賀

[illegible]竹やきかする代のためよ

[illegible]のだのれをしるいきを哉

右四句仲秋下旬

去んのうくに行とはまりて

人このほをそ多くして

再年満目荒涼
年経る仏法衰
ぬるかもきえ浮世をのがれやいとゞしの
ぶのしるべとなるべき哉

仲秋

一年よりてふ自ゆえ花月雪
いつもそなわるものからかいらぬ世
いとかなしきものなれども秋
人の教えるすゝめやあん
絶自仲旬

庵の松風

三つかはるかはるとて
よくらに通ふ庵のまい風
当文公市位を付せらるゝ
ゆきを
雲の上かすみもたて次第に山
ゝすゝ代のうらはほる君哉

暮

やうやうやうやうとたゞ一年の
ゆくすゑくらしてゆくかはい

西日とゝしわ
一年もとやくれ世の世よくら
と夜と明るよ寒ひむ〳〵ん

志〳〵のかゝふ世のとつゝと大和歌ゆつゝよ
待宝立妻よりゝ来るこゝの京かこれ
ゆ海川の添め一年のゝとゝとゝつ
ゆ海めゝのたのしゝとゝけゝんゝゆ
〳〵一ゝゝゝゆつゝくゝれの時ゝ年
よっせゝゆいせゝゝゝゝ
干時延宝七未年中

舒泰軒
野洞

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan